



### 私の幼い日の七夕祭

松本の夏の空は、抜けるように透き通って青く、高く澄み渡る。王ヶ鼻に入道雲がわき立ち、夕立が来る直前に、竹藪やぶを渡る涼やかな風の音を聞いていると、幼い日の七夕祭のことが蘇ってくる。

松本では七夕祭は、月遅れの八月六日・七日に行われる。

蔵の軒下には、竿に干された、薄緑色の干びょうが風になびき、坪庭の池の水は、百日紅の大木を映して、桃色ももいろに漣立なみだりっていた。

六日の朝「七夕様を飾る」と言っ、神の依代よしろとなる笹竹を、裏の竹藪から祖父に切ってもらい、字が上手になるようにと早起きして集めた里芋の露で磨った墨で、短冊に願い事を書き、紙縫こまゆにして笹竹に結び付け、広縁の軒下に縄を張り、七夕人形を何体も吊した。短冊を飾った笹竹は、風にさらさらと音をたてて揺れ、軒先の七夕人形の牽牛星と織女星が、天から舞い降りてきたかのように、風に舞っていた。

牽牛と織女の形をした男女一对の木製の七夕人形に、「七夕様に着物をお貸せする」「貸小袖」と言っ、母が、私と弟の絹の一つ身の着物を着せて飾ると、華やいで、今年も七夕様がきたと嬉しかった。七夕様に着物をお貸せすると、着物の襟数が増え、着物に不自由しない、裁縫が上達する、子宝に恵まれる、子どもが病気をしない等々の幸運を授かるという。



七夕人形は、七夕雛とも言われ、初子が生まれた家へ、初七夕の折に、羽根親、仲人、親類から「生まれた子どもが健やかに成長すること」を祈って贈られる。私の家の七夕人形は、父の姉（夭折）に山辺林の伯母から贈られたものである。この山辺や北安曇郡小谷村では、明治末まで、集落が共同で、男女対の七夕人形を部落の入口へ飾り、祭祀が行われていたが、今では、個々の家毎の行事になっている。今は、七夕人形贈答の風習もすたれてしまったが、人形店街の高妙町（小安寺小路）で買い求めることはできる。

広縁には、机を置き、夕顔、胡瓜、西瓜、南瓜、大角豆等の蔓の伸びる野菜や、桃、葡萄等の初物の果物をお供えした。篩、箕、杵も、豊作を願って供えた。七夕様に御馳走を供えに行くのは、子どもの役目で、食事毎に、できたての、ほうとうや饅頭を、心弾ませて七夕様にあげに行った。

六日の夜は、公民館で花火大会が催された。帰り道、頭上に天の川が横たわり、彦星、織姫星、北斗七星が、大きく輝いていた。

七日は、盆始めで、朝涼しいうちに、分家の人達と一緒に墓の掃除に行った。

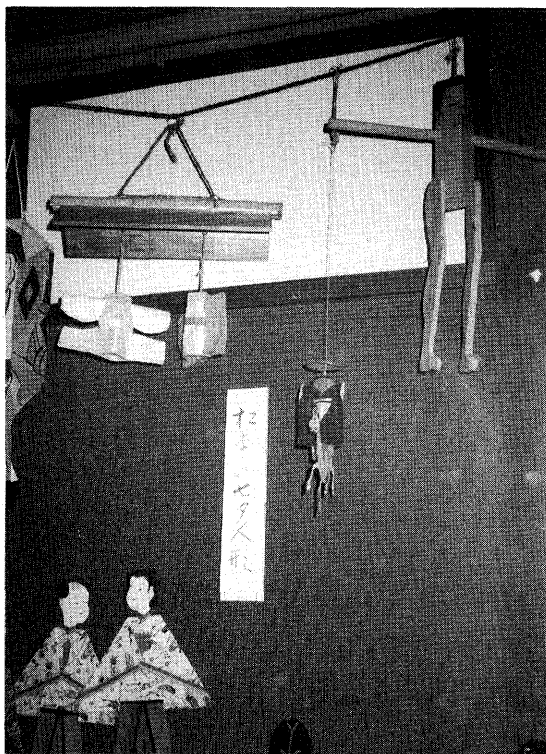
八日の朝、私は、近所の子どもと一緒に、「七夕様を送る」と言っ、笹竹とお供え物を持って「けみ」と呼んでいた近くの川へ、七夕様を流しに行った。北安曇では、紙の七夕人形を、流し雛のように、川へ流したり、「眠り流し」と言っ、眠気も一緒に川へ流す。



重ねた着物の十五 cm位の女の流し雛形の人形。

木の頭と胴に、大祓おおはらいの人形ひとがたの紙の着物を重ねた三十 cm位の男女一对の人形。五色の着物は、年々新しく貼り重ねられ、二十数枚にも及ぶ。

杉板と竹で屋根形の祠ほくらを作り、その中に吊された角材に顔を描き、男は青、女は赤の紙の着物の十 cmにも満たぬ素朴な一对の人形。



▲ 七夕人形コレクションから



娘達と生活するようになってから、季節は、風と共に、秘かに廻りくると感ずることがある。

七夕は、夏と秋との交叉祭<sup>すまわい</sup>。作物を豊かに実らせる神秘的な力を持つ、初秋の風の吹き始める時である。

信濃は松本の七夕人形を飾る風習は、現実的な着物の虫干しの意味の他に、着物に付いた目に見えない穢れを、そして身の穢れをも、七夕人形に託して、秋風に吹き飛ばして、厄落しをしてもらい、子どもの健やかな成長や、秋の豊穰を祈ったのであろう。

たなはたのうれしからましあしたより

いのり日ぐらしもろ声にして 真澄



(松本市在住・舞々同人)